

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

パブリックな物質文化研究にむけて＜共同研究：
国立民族学博物館の資料収集活動に関する研究：
創設後50年のレビュー＞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2024-04-04 キーワード: 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000119

パブリックな物質文化研究にむけて

飯田 卓

物理学的な物質文化研究

映画「インディ・ジョーンズ」やマンガ『MASTER キートン』は、物質文化に造詣の深い考古学者を主人公にした物語である。主人公は、道具だかなんだか判断できないような手元のモノを巧みに使い、ピンチをきりぬげ、事件を解決する。具体的には、そのモノの物理的属性（硬さや柔軟性、弾力性など）と形状を踏まえて、パチンコのような飛び道具をその場で作りだしてしまうのである。わたしがこのことに興味をもつのは、調査地でお世話になっている漁師たちが、われわれには漁具と思えないものを漁具として用い、魚を捕獲するための新たな方法を次々に開発するからである（飯田2014）。

上記のようなモノの物理的属性と形状への着目は、18世紀から19世紀にかけて登場した物質文化研究の特徴である。とりわけ考古学者は、調理器具が土器から金属器へ変化したことを、金属器の優れた耐久性という物理的属性から説明してきた。また、刃物の形状やサイズによって、その刃物がなにを切るのに使われたかを推測してきた。構造、すなわち、複数の素材の組みあわせかたも重要である。ひとつの斧でも、刃の面と平行に柄を取りつける「縦斧」は木を切断するのに適しているが、刃の面と直行する方向に柄を取りつける「横斧」は、木の表面を少しずつ削って窪みを作る（「はつる」）のに適している。英語でも、前者は axe、後者は adze と異なる名で呼ばれている。

このように物理的属性、形状、構造といった観点を踏まえ



物理学的物質文化研究の対象、マダガスカル・ヴェス漁師が手作りで作った銚銃。スプーンの柄や中古タイヤの一部が使われる。（1998年2月頃、マダガスカル・トゥリアラ州、筆者撮影）

た物質文化研究を、かりに物理学的と呼んでおこう。先史時代の遺跡から出土するモノは、まずもってこうした物理学的な観点から同定されてきた。じつは、20世紀前半頃までに作られたほとんどの博物館展示も、同様に物理学的な観点をふまえている。ジオラマ展示のように例外的な試みもあったが、ほとんどの展示では一点一点のモノを見せ、それが観覧者の知っている道具と比較していかに優れているか——場合によっては劣っているか——を示し、道具の歴史的発展を理解させようとしたのである。

記号学的な物質文化研究

物質文化研究には、もうひとつ別の流れがある。たとえば、ナポレオンのエジプト遠征をきっかけに始まった古代エジプト文字研究がそれで、モノを物理的に考察するのではなく、文字記号として「解読」する立場である。ロゼッタ・ストーンはたまたま石材でできていたが、この素材がなんでできようと、文字の内容が同じであれば、シャンポリオンは同じ結論にたどり着いただろう。このアプローチは、アルケオロジー（考古学）というよりはフィロロジー（文献学／文献史学）あるいはヒストリー（歴史学）として存続している。

シャンポリオンの研究を物質文化研究と呼ぶ者は多くない。これは、文字と言語を扱っている以上、それを「物質文化研究」と呼ぶ必要がないためだろう。ところが、学問的にはほとんど意識されないかたちで、文字の書かれていないモノを記号として扱う研究や実践は細々と続いてきた。たとえば、歴史的人物の遺品を展示するような例である。マハトマ・ガンディーやキング牧師など歴史的人物の遺品は、現代と異なる素材・形状・構造を有するかもしれない。しかし、観覧者の関心はそこにはないだろう。その遺品は、歴史的人物が手にしていたという、物理的性質に還元しえない記号論的特性を備えているからである。

モノがもつこうした側面を研究しようという物質文化研究の流れは、人類学の分野において、1980年代によく明確化した（Appadurai 1986; Miller 1998）。その背景には、大量複製と大量消費を特徴とする社会環境を人類学的に考察しようとする目論見があった。われわれのそばにあるモノの多くは工場で大量生産されたコピーのひとつにすぎず、物理学的には無個性である。しかしそれがたどった社会的来歴は唯一無二であり、なかには、所有者であるわれわれ自身

飯田 卓 (いいだ たく)

国立民族学博物館グローバル現象研究部教授。専門は生態人類学、視覚メディアの人類学、文化遺産の人類学。民博ではアフリカ地域展示を担当。編著に *Heritage Practices in Africa* (Senri Ethnological Studies 109) (2022)、『文明史のなかの文化遺産』(臨川書店 2017年) など。



記号学的物質文化研究の対象、マダガスカルのマハファリ人が作る墓標。故人が所有していたウシとひき換えに作られ、その裕福さを示した。(2008年1月8日、マダガスカル・トゥリアラ州、筆者撮影)

が記念品として手元に置いている場合もある。このように、製作・製造ののちにモノが帯びるようになった属性を研究しようというのが、ここでいう記号学的な物質文化研究である。

大量複製された商品に較べると、手作りの民芸品や芸術作品は、強い個性を帯びている。だからこそ、これらのモノに関心を寄せる記号学的な物質文化研究は、芸術学やミュージオロジーとも関係が深い(吉田 1999)。1980年代にミュージアム論が盛んになったのは、民族誌批判やカルチュラルスタディーズが盛んになったことに加えて、新たな物質文化研究の流れが表面化したこととも関係しているといえよう。

フォーラムとしての博物館ふたたび

われわれがとり組もうとする共同研究の目的のひとつは、こうした「ふたつの物質文化研究」を念頭に置きつつ、国立民族学博物館(以下、民博)の研究者がどのように物質文化研究を理解して収集に従事したかを明らかにすることである。民博が創設された1974年、あるいは展示場がオープンした1977年当時において、記号学的な物質文化研究はほとんど意識されていなかった。そして展示場にあるモノは、その製作地や使用地にありふれており、個性の強い芸術品とは明らかに別物だった。民博は、モノの個性というよりも、地域的特性を示そうとしたのである。用途が類似したモノを数多く展示して、地域ごとの様式の共通性やバリエーションを示そうとする「構造展示」は、地域と様式が結びついていることを前提としていた。ここでいう「様式」には、記号学的側面もないわけではないにせよ、強調されたのは多分に物理学的側面だった。つまり、少なくとも開館の当初において、館員たちは、物理学的な物質文化研究を意識していたはずなのである。

上記のような「民族誌的」状況は、開館後もなく大きく変化する。たとえば田辺繁治名誉教授は、創設50周年記念事業の一環としておこなったインタビューのなかで、1990年代に調査地(タイ)の物質文化環境の変化を実感したと述べている(この映像は2024年中に公開予定)。この年代についての認識は、研究者や調査地・収集地によって、多少異なるにちがいない。重要なのは、民博の収集活動が軌道に乗りはじめたまさにその時期、物質文化環境の変化が世界的に起こっていたということである。

物質文化研究の変化と物質文化環境そのものの変化、このふたつが民博の収集活動に与えた影響を明らかにすることは、現在進展しつつある人文社会学のパブリック化を新たな観点から見なおすことにつながる。ここでいう「パブリック化」とは、知識の外在化が進行し、それまで研究者の関心外だった事項を研究者自身がデータベース化し、さらには研究者コミュニティ外の人たちもデータベース化に参加できるよう求められるような変化のことである。民博が進めるフォーラム型人類文化アーカイブズ(情報ミュージアム)は、ソースコミュニティの知識をデータベース化していくことに主眼があり、「生き字引き」である研究者の見解は必ずしも重視されない。このプロジェクトでは、ソースコミュニティの観点からモノの「個性」を記載し、物質文化の変化がもつ意味を現代社会に問いかけようとしている。

このことはとりもなおさず、物質文化研究が再編成されていく過渡期において、その意義がどのように変化していったかを明らかにすることでもある。スマートフォンが登場した近年において、物質文化研究はさらに変化しているかもしれない。民博研究者の活動をとおして、そうした過渡期の社会状況を学史的に明らかにすることが、共同研究の大きな目的のひとつである。

引用文献

- 飯田卓 2014『身をもって知る技法—マダガスカルの漁師に学ぶ』京都：臨川書店。
吉田憲司 1999『文化の「発見」—驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。
Appadurai, A. 1986 *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. New York: Cambridge University Press.
Miller, D. 1998 *Material Cultures: Why Some Things Matter*. Chicago: University of Chicago Press.